

みんな十九歳だった

HE WAS NINETEEN AND I WAS.....

山川健一
KENICHI YAMAKAWA



講談



著者|山川健一 1953年、千葉市生まれ。早稲田大学卒。在学中に「天使が浮かんでいた」で「早稲田キャンパス」文芸賞受賞。1977年、「鏡の中のガラスの船」で第20回「群像」新人文芸賞優秀作品賞受賞。現在は小説のほかロック批評やエッセイでも活躍、ロック・バンドで自ら演奏もしている。著書に『鏡の中のガラスの船』『塚の中のメッセージ』『パーク・アベニューの孤独』『コーナーの向こう側へ』などがある。

みんな十九歳だった

やまかわ けんいち
山川健一

© Kenichi Yamakawa 1986



講談社文庫
定価380円

昭和61年10月15日第1刷発行

発行者——野間惟道

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——株式会社東京印書館

印刷——株式会社東京印書館

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。(庫一)

ISBN4-06-183860-1 (0)



講談社文庫

みんな十九歳だった

山川健一

講談社

目 次
CONTENTS



ミック・ジャガーも

中原中也も

マイルス・デイビスも、

みんな十九歳だった

不良少年のマインド・ゲーム

12

ロック・フリークからの返信

18

追憶のテレビ局75

21

転校生の気分

25

成熟を拒否する志

29

フールズ・パラダイス

33

クラスメイト・コンプレックス

36

ラヴ・レター

38

心に効く爆薬

44

新しいルネサンス

47

密室恐怖症

49

ビートのある言葉

51

眠るための音楽をもとめて

53

ホックニーの青 55

ラインを超える絵描きたち 57



ブラディ・ジャマイカへ、

もう一歩

ゲットーからやってきた音楽 70

特別な人達が住む特別の場所 82

ラストフアリアニズムについて 96

レゲエ・ミュージックの誕生 105

ラヴ・アイランドの匂い 117



エアブレインに乗って、

世界のルーディに

会いに行きたい

恋人たちのギリシャ神話 130

当世ロンドン事情 142

シビアな街、ニューヨーク 145

L・Aのぶっそうな夢 147

ブルガリア・メモリー 151

JFKとは何か? 158



朝になるまで、

一人で

こんな本を

読みつづけていたい

アーウィン・ショ어의幸福な私生活 164

繊細な光を放つマンデリシュタム 168

アフリカに関する個人的な夢二つ 170

金井美恵子は何んて魅力的なんだろう 178

伊藤比呂美の爽やかな勝利 182

青野聡の確信の深さがうらやましい 185

『さよなら、ギャングたち』は、もはや小説ではない 189

果敢に総論へ挑む三浦雅士 192

『宇宙からの帰還』を読んで神のことを考えた 195



胸の中の音楽こそは、

わんぱく小僧の神様なのだ

鏡としてのレゲエ・ミュージック 200

ロックンロールの奇蹟 209

血と金髪と、ロック・ミュージック 216

世紀末のサルサ 223

ブルース・スプリングステインからの挨拶状 227

ストーンズは今、一体どこへ行こうとしているのか? 232



彼も彼女もぼくたちも、

いつだって

ビート・クレージ

ザ・フー『イツ・ハード』 240

ブルース・スプリングスティーン『ネブラスカ』 242

J・ガイルズ・バンド『サンクチュアリ』 245

フリー『ファイアー・アンド・ウォーター』 247

相変わらずいかがわしいロッド・スチュワート 250

近頃はまたピンク・フロイド 252

ボニー・レイットを追いかけて回したい 254

ディキシシー・ミッドナイト・ランナーズ『トウ・ライ・アイ』 256

ボブ・マリーのジャマイカ 259

永遠の逃亡者 ジミー・クリフ 262

さよなら、マイルス・デイビス 264

ノエル・ポインター『ファンタジア』 266

ホルガー・シュールカイ『ペルシアン・ラヴ』 268

PP&Mは六〇年代のタイム・カプセルだ 270

あとがき 274

文庫版あとがき 275

解説 ジム・ファイル 277

みんな十九歳だった
HE WAS NINETEEN AND I WAS.....



ミック・ジャガーも

中原中也も

マイルス・デイビスも、

みんな十九歳だった

不良少年のマインド・ゲーム

人は十九歳の時にそのピークに達するのだ、とぼくは思う。仕事そのものとはともかくとして、内面的には、十九歳にして既にピークに到達してしまうのだ。

その後の彼のプログラムは、無意識裡にはあるかもしれないが、十九歳の時に組み立てが完了してしまう。今なら、はっきりそう言える。

十九歳の時、高校時代にメチャクチャやっていたぼくは大学入試に失敗し、おまけに父親と喧嘩し、殴りとばされ、「おまえなんかもう息子でもなんでもない」と家を追い出されてしまった。

三畳一間のアパートを西武新宿線の田無に借りて、アルバイト生活が始まった。そのアパートには浪人暮らしの若い男たちだけが住んでおり、古雑誌置き場にはボルノが山積みされ、南沙織のポスターがそこいら中に貼られ、共同の流しは詰まり、狭い庭にはBVDのパンツがずらりと並んで干されていた。ひどいものだ。

夕方になると、ぼくは後樂園球場へ出かけた。前の日誰が着たかわからない水色の上下の、ちよっとダブダブのユニフォームを着こみ、帽子をかぶり、弁当かコーラを売って歩くのである。

「エー、弁当はいかがですか。イナリ、幕の内、トンカツ弁当はいかがですか。エー、弁当はいかがですか」

ギャラは売り上げ次第だったから、とにかく一個でも多く売らなければならない。ところが、王より打率は低いのにどういうわけか四番を打っていたあの長嶋茂雄がバッター・ボックスに立った時に、「弁当！」などとやろうものならたいへんだ。「バカヤロウ」「ウルセーゾ」などと怒鳴りつけられてしまう。長嶋が三振した後も同じことだ。何しろ後楽園は、一塁側も三塁側もジャイアンツのファンばかりなのである。

二アウト、ランナー一、三塁。長嶋二―三から左中間を破る二ベース・ヒット。三塁走者の柴田がホームへ帰ってジャイアンツ一点先取。外野スタンドはわれんばかりの拍手。そこでひと呼吸おいて、「エー、弁当！」。この、ひと呼吸、というのが重要なキイなのである。

というわけではなくは未だに読売ジャイアンツも、読売新聞も報知新聞も、ジャイアンツの試合しか中継しないNTVも嫌いだ。とりわけ長嶋茂雄は大嫌いだ。

話が横道にそれてしまったが、あの頃、ぼくは内面的には自分自身のピークを迎えていたのだと思う。あの頃の風景の見え方、ブルースの聞こえ方、生々しい女たちの肉体、一万円札の価値といったものを、ぼくは今でもはっきり思い出すことができる。

一歩まちがえば、ぼくは犯罪者だった。いやいや、早朝近所の家の牛乳や新聞を失敬したり、自転車を盗んだり本を万引きしたりしていたのだから、立派な犯罪者だったのである。ただビギナーズ・ラックで捕まらなかっただけの話だ。そうした、後で考えればじつに現実的な、し

かし当時のぼくにとっては非現実的で抽象的な日常生活の中で、風景はとてもクリアに見えた。なにしろ、回りはみな敵ばかりなのである。世の中で、敵の姿ほどはつきり見えるものはない。アイツもアイツもアイツも敵。というわけでよく喧嘩した。殴り、殴られて帰ってきた。

それは、まさしく生のピークであった。しかし、それを展開するための方法論がまったくなかった。職業のことなど、もちろんまだ考えてない。後樂園へ行きさえすれば金が入るのだし、秋になってプロ野球のシーズンが終わればまた他の仕事を探せばいいのだから。ぼくはひたすら本を読み、ブルースのレコードを聴き、そうした時に頭をかすめる印象のフラグメントをノートに書きつけていた。

方法論はなかった。しかし、自分が今ピークを迎えているのだということは、本能的に感じていたような気がする。自分自身がヒーローの長い映画を観ているようなものだった。この瞬間を逃したら後でたいへん悔しい思いをするにちがいない、と思うと、いつもノートに向かった。

《牛乳^グ壺の中の思想》、《クリーム色の壁》というタイトルの、読書感想文とレコード評が中心のノートが二冊たまった頃、ぼくはゆっくりと、自分のピークが去ってゆくのを感じていた。その頃、ぼくは大学生になっていた。そして、もっと明確に、自分が何を欲し何をしようとしているのかということを認識しようとするようになっていた。わかりやすく言えば、死んだブラيان・ジョーンズよりも生きのこったミック・ジャガーになりたい、と思うようになっていたのである。

自分の欲望の量と質をはっきり見きわめること。大切なのはそれだ。そして、やりたいことが二つあった。小説を書くことと、バンドをやることである。たまたま小説を書いたらそれが文芸雑誌に載り、気がついたらそれが職業になっていた、という人がいるけれども、ぼくなどにはとても信じられない話である。十九歳の時、フラストレーションのかたまりだった時、何かしたいと思った。とにかく、誰かに何か伝えたいと思った。そのための方法を考えた。方法は二つあった。それが、文章を書くことと、音楽をやることだった。

ぼくは、良く言えばしたたかに、悪く言えばセコく立ち回ったのである。

その頃、今思いついても口惜しい出来事がいろいろあったのだが、この際だから恥をしのんで二つだけそのエピソードを書いてしまおう。

その一。十九歳の時、まるでノートに記すように三十枚の小説を書いた。「天使が浮かんていた」(角川文庫『ローリング・キッズ』に収録)というその作品が『早稲田キャンパス』という学生新聞でささやかな賞をもらったことから、ある出版社から小説集を出さないか、という話があった。高校時代の習作をコアに、ほぼ二年がかりで二百枚の作品を書き上げた。出版社の人に、その原稿を渡した。これは面白いよ、とその人は言った。本が出ることになり、ぼくは悪友どもに、出たら一冊買えよ、と言って歩いた。ところが間際になって、出版社の企画が中止になったのである。原稿を渡してから一年近くもアアダコウダ、スベッタコロンダとやった挙句のことなので、メゲた。三十歳を少し越えたその人は、喫茶店でその作品の弱点をエンエン述べつづけ、しかし決して書き直せとは言わないのであった。